

元利と家賃との外に、金三百圓、あなたにお禮としてさし上げますから、何卒それでお譲り下さる事は出来ませんまいか？

(善) エツ、な、何と云ひなはる。元金と利子との外に、滞りの家賃も拂て、まだ其上に三百圓といふお金を？

(光) 左様！

(善) あの、わたしにおくはなるのか？

(光) 左様！

(善) えらいこつちや。福が降つて来た。イヤもう、承知も不承知もあるもんかいな。よろしやす。よろしやす。そしたらわたしも借金なくして、あとに金が四百圓餘りも這入るといふわけ。イヤこりやまわ今年や大家の當り年や！

(光) それでは御承知を下さるんですねえ！

(善) ヘエ、ヘエ。モウ、あんた承知も承知も、承知承知アハハや！

(光) それぢや、今晚、私の宅へお越下さい。萬事はその時に御相談して、金もお渡しませう。失敬しました。さあ、母様、蓮枝、行きませう。

いづれも會釋して入る。

(善) えらいナ。年は若いがいえらいナ。餘程儲けて来たと見えるナ。今晚行たら御馳走か。あ、今年は福徳の三年目や！

と行かうとする業作抱きとめて、

(業) オイ、善公、お前は能からうが、おれは一體如何するのだ？

(善) 如何もしえへんが。あなたに借つた金は明日の朝皆返すがさ！

(業) そりやまあ能いが、あの娘は？

(善) 間違ひやがな。間違ひやがな。大體あなた、あのお娘は、茶瓶のあなたに釣合はんがな！

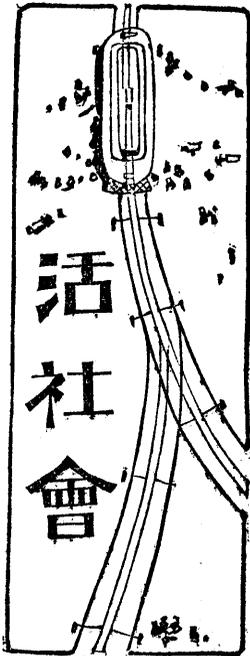
(業) 何だと。

(善) 怒りないな。お前はんにはまた能い女房をと向ふを見て一寸氣を變へ、

(善) 世話したげるわいな！

と行きかゝる引張る。をかしみの見得、賑やかなる合方にて

【幕】



足尾銅山の坑夫

天涯茫茫

足尾達摩と古河様は

金をほり、錢をこる

と地下數百丈の下、鑛の音高く、巖石を打ち砕いてある足尾銅山の坑夫は、日頃の氣性を現はして、今度家い事を造らした。本誌の主任先生は、送早く、此の鑛山勞役者の生活、状態などの御依頼であつたが、自分が足尾の勞役者を調べたのは、今より二三年前で、今日の現狀は能くは知らぬが、しかし大した相違は有るまいと、二三知人の言を參照して左に同勞役者の一般をします。

二種の大現象 今度の騷擾に對して、自分は一種の大現象を見出しである、一は至誠會の煽動(一)に

乗りて演じた暴動其れ自身で、之は何人の眼にも見えて居るが、今一ツは、此の騷擾を機として、足尾の巖窟を逃げ出した掘子の多いといふ其れで有る。若し今度の騷擾を以て足尾坑夫の生活状態を變則に現はした積極的現象だとすれば、足尾の鐵柵を逃げ出した者の多いのが、消極的現象だ、陽と陰、消極と積極、その現はれた結果に千萬里の差異は有るが、足尾勞役者——特に鐵窟に入りて働く勞役の境遇を説明してゐるに於ては、二者異なる所が無い。強き者は其の不平を暴動に現はし、弱者は之を機會として、飢腹を抱いて、足尾を逃げ出したのだ。何

活社

種々雑多の勞役者が含まれて居る。其の筋の調査に依れば、役員二百幾十人に對して、職工及鑛夫其他の雜役者は、一萬五六千人だと數へられてゐる。鑛山勞役者の中心は坑夫であるのは、言ふまでもないが、職工といふのは、撰鑛、製鍊、機械、大工、鍛冶等の類で、鑛窟外の普通勞役者だ。いや、また鑛窟外の勞働者に、一大勢力あり、其れは土方といふ階級だ。鑛山勞役者の特色は、蓋し坑夫と、此の土方であらう。本山でも、通洞でも、奥の小瀧でも、飯場の外に、棟を駢べて、足尾銅山の特色を發揮してゐるのは、實に此の土方で、その性格、境遇は、坑夫と大に似て居る。

▲一夜大名一夜乞食 「宵越しの金を遣はぬ」とは江戸時代に於ける職人の事、今や東京の職人も、絆天を羽織に換へ、財布の口を秩然と締めて、郵便貯金の帳簿を眺めて楽しんでゐるが、唯獨り此の二十世紀の源頭に遺つてゐるのは、土方の社會ばかりだ。

試みに本所花町或は深川富川町、若くは業平町の浮浪窟に赴つて見よ、その多數は日稼人足と、男を賣つてゐる此の土方であるとは、木賃宿の事情に通じてゐる者は、何人も知つてゐるで有らう。營に木賃宿ばかりでなく、本所若宮町の無料宿泊所の如きも、來宿者の過半は、賭博で眞裸體に爲つた土方で占められて居るのを見て、土方の模様が譯らう。實に此の土方は、

▲ゴリキー小説中の人 左様だ、若し我國に小説の材料に浮浪人を取る詩人が有れば、屹度此の土方に摸型を取るで有らうと思ふ。ぱつぱと費つて、宵越しの金を持たぬのは、此の土方であるのだ。だから顔を買つて、二三十人の子分を持つてゐる棒頭でも、不景氣には木賃宿に轉頓してゐるが、若し爰に大工事起つて、景氣立てば、十圓札の六七枚は何時も腹掛に入れて居る。假に二三十萬圓の土木工事あれば、その工事を受負つた親分は、一年の中に一二萬兩の

足尾銅山の坑夫

金を儲けるのは此の社會の常態。現に二三年前に歿くなつた芝新網の親分宮野長吉なども、十萬圓以上の財産を遺こしたといふではないか。そして此の土方は、日本全國に連絡あり、裸體一貫で、全國をワタリあるくことが出来るから、面白い。特に面白いのは、綱子といふ土方の娘子軍である宛然としてニーチェ



だ、之は子分の千人も持つてゐる。之より坑夫の生活状態に入る。

▲鑛山勞役者中の勢力者 といへば、今度の騒變に中心と爲つてゐる坑夫であるとは言ふまでもない。風采より先づ披露すると、市中の電話工夫其の儘、

目倉縞の筒袖に腹掛、襦袢に股引、跣足足袋といふ装束、襟に甲の組乙の組と

の本能説を實現して、性欲を満足してゐるのは、奇言ふべからずである。足尾銅山の土方といつても、東京附近の土方と些も異つて居らない。足尾で顔を賣つてゐる土方の親分は、本山では小松川の兼治、通洞では金田屋、西岡、小瀧では西岡身内より出た森戸某

組の名が附いて居る、腰に尻敷を纏ひ、片手にカンテラを携へて、暗窟に入るのであるが、氣象の立つてゐるとは尋常では無い。道具が見えぬと言へば喧嘩が初まり、仕事が鈍いと言つて組打が起る。なんの今度の騒擾など、坑夫の状態に熟れた者には、

不思議でも何んでもなく、唯だ社会的に暴發したのが珍らしいのだ。次に鑛窟内の模様と、操業の模様を言つて見やう。

▲生温るく生臭き暗窟 初めて鑛窟に入った者とする。——初めて窟内に入った者は、何人といへども、じみじみとした生温もい風が、四方に充ちて居るのに胸を突く、十歩、二十歩、進みゆくと、その生温るい空気に、腐つた魚のやうな一種得ならぬ、生臭い風が交つて居るのに、一層氣を悪くする。爾して、時々ぼたりくと水滴が頭天に垂れるので、二度吃驚する。前方には微かにカンテラの燈光見えるので、草鞋を踏み締め、足を運ぶ、一二週間にして、之に熱れるのが良いとして、路程の遠いには驚かると。操業場邊の窟内にトロツタあり、坂あり、その坂の遠いのは、十町ばかりもあり、斯くて、漸やくにして一里乃至二里の地底なる見張所に到達するのだ。此處に鑛札を納めて、操業場に取り掛るので

あるが、平板なる場所と思つては大間違、屏風を立てたらんやうなる巖石を梯子で上つた、その絶壁が操業場であるのだ。

▲鑛窟内の危険 中にも最も危険を覺ゆるのは、歩行の途中、前方に、今や落ちんとする巖石が、ミリ／＼と音を立てゝゐるのに出會ふ。流石鬼をも挫ぐ荒くれ男も、之にはひやりとする。であるから、窟内に入る者は、朝入れば、歸途の生命が無い者と感念してゐる。現に怪我人のあるとは、日々三四人は珍らしく無い。實に生命懸の操業だ。此の生命懸の仕事遣つてゐる坑夫及掘子の得て居る報酬は、如何なるものであるか、之は今度の騒變と關係があるのだ。なんの社會主義者の煽動など、今日の日本では、其れ程大した勢力を持つて居らない。

▲坑夫及掘子の賃銀 此處に文章を中途にして、窟内の勞役者にも種類あるとを讀者に注意する。それは純然たる坑夫と、坑夫の操業を助くる掘子である。

坑夫は全國に連絡ありて、仲間も親分子分の組織に爲つて居る。

が、掘子は一種の雜役夫で、日稼人足と違はない。であるから、暗窟に入つて仕事を試るのは、兩方同じであるが、性格、境遇、それに賃銀など非常の徑庭がある。故に若し弱者といふ點より言へば、余輩は



寧ろ此の掘子に無限の同情を表す。今度の騒變に逃げだした者に掘子が多いのも無理が無い。それは兎も角も、坑夫の賃銀は、砲兵工廠の職工などと同じく、出來高に依りて支給せらるる所謂受負といふやつであるが、掘子の賃銀は、日稼人足等と同じ

く日給だ。爾して坑夫の収入は、日に依り月に依り

て相違はあるが、一日八十錢乃至一圓二十錢位であるが、掘子は僅に三十六錢乃至四十錢、如何だ、随分懸隔があるではないか。

▲表面の賃銀と實際の賃銀 右は表面事務所より支給される、金額を言つたので、實際の収入は如斯なものであると思へば、古川の役人と同じく、お芽出度い骨頂。坑夫の八十錢乃至一圓二十錢も、飯場の食料を差し引き、草鞋代カンテラに用ゆる石油代等を引けば、正味残る金額、三四十錢乃至五六十錢、否、五六十錢といふのは、良い分だ、多くは三四十錢止まり、之に煙草代、辨當の肴代等を除けば、ほんの二十五錢か、三十錢。坑夫はまだ良い、掘子となると、殆んど言語の外である。四十錢の日給者としてやう、食料に十六錢五厘を引かれる、カンテラの石油代三錢五厘、草鞋一足代三錢、(日に二足を費やすともあり)を引くと、二十錢となる、此中より肴代、煙草代を引くと、正味五六錢しか手に遣らぬ。であ

るから、表面と實際とは月と驚ほどの相違があるのだ。

▲足尾は別世界 足尾は全般に於て別世界である。社會の根底は、世間と交渉の薄い坑夫を中心として、各種の力役者が取り捲いてゐる。此方には、嚴然として一山の帝王古河鑛業會社が控へてゐる。多數の小商人と淫賣婦とが、此の別世界に旁午錯綜してゐる。然かも黒幕を外して、その人種、物價、衣食住を見る、世人の想像し得ざる珍事實が出てくる。先づ物價を見よ、鮭の切身は三錢で、鱈の切身が一二錢、漬物一本八錢、淺草紙四十枚一帖二錢、すべて物價は東京の二倍であるが、坑夫、掘子、及び土方等の食物を見ると之は又驚く、米は南京米、汁といへば、干葉に鹽をぶッ込んだ辛い鹽汁、堪まつたもので無い。そして此の別世界に入ると、身體の健全なる間は買殺し、鐵柵で縛られるのだ。掘子の例を以てすると、最初の月は、給料が貰へず、二

夫坑の山銅尾足



他に轉せんと覺悟を極めても、飛び出すことが出来ない。偶々飛び出す者が有れば、裸體一貫、空手で逃げる外他に方法が無い。足尾の別天地は之ばかりで無いのだ。働ける間は、鐵柵を作りて、右の如く自由を奪つてゐるが、偶々病氣に罹る

夕月目に一ト月分の給料が漸やく手に入る、之は足留めの一策であるとか。加之、足一ト度足尾の別世界に入れると、坑夫といはず、掘子といはず、土方でも、誰でも携帯品といふ携帯品は悉く事務所に預ける慣習が行はれてゐるのだ。だから、足尾に厭いて

と最後、藥壘に水を入れて放つて置く。そして危篤に迫ると、素知らぬ顔に傍を向いて、早く倒死ばらねいか。——之は想像でないことを讀者に注意する。▲木とつて來ると死んで仕舞ふ。序に言つて置くが鐵窟に入ると、一二年の中に、顔色が青く、白く、

活氣が消えて一種の容貌と爲る、その中に漸次に死んで居るが、操業場の路程が遠いので、往復三四

時間を取られるから、八時間が十二時間と爲るといふ。

▲暗窟外の坑夫 以上、概略であるが、坑夫の模様を書いて見た。更に飯場に歸つた坑夫は、如何な風であるかと言へば、金の有る連中は、十人二十人組を作りて、例の賭博を遣るのが普通、毎晩のやうに行はれてゐる、一ト晩に五圓、十圓、二十圓以上の取引が行はれる。擧句の果は、鼻歌謠ひながら、達摩買ひに出掛けゆく、その生活を不健全と言は言へ、右のやうな境遇では、如何せ詮方がない。――足尾では、金の無い奴は、品行方正であるのだ。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

ペイパ師

赤毛布

ペイパ師とは實道紙幣行使者の符牒だまうであるが、之まで種々な詐欺師の内事は新聞紙に雑誌に紹介せられて居る、けれど此へ

イパ師の悪業は却つて見ない、所で或る詐欺師が正業に基き舊悪の懺悔談をした、其の中のペイパ師談は勸業博覽會に際し、東京見物に來られる地方の方のお耳に入れる價值があるから、殊更に紹介する事とした。

△詐欺師の自白▽

詐欺師仲間には詐欺賭博……お天氣師は詐欺地面師など、云つて、諸方面へ潜み良民の膏血を啜り、悪事を遣しうして居ますから一面識もない者と、言葉を交換しては爲りません、之さへ豫防したら恐らく詐欺師の術中へは陥らぬものです云々」と云つたが、實際火のない所に煙は昇らずで、危険の場所へ立寄りさへ爲なかつたら、災害には罹らぬのは勿論なれど、本題のペイパ師に限り其の弱點を狙ひ、機に乗じて悪策を講じるものであるから、他のお天氣師や詐欺賭博師のやうに田舎者などに變装しない、所謂理詰で奈何しても被害者となるやうに出來て居る、此ペイパ師の潜伏場所と云つたら、多く投機社

會を徘徊するのである。

△表面は實業家▽

結城紬の羽織に前垂掛と云ふ風采で、何處から見ても實業家らしく見せ掛け、各所の仲買店又は合百宿へ潜り込み、熊鷹眼で椋鳥を探して居るのだが、

悪事は働かないから、相場師仲間でも渠等を詐欺師と知るものなく、渠等は尤も眞面目に信用を得る事に努めて居るのだ、

△被害者は素封家▽

此被害者は慾の鏡に身を堅め各取引所へ足を踏込



子守唄

田

其の消息を聞得るには交際を廣くせねばならぬ、所で渠等は投機界を轉つて居る羽織破落戸と俱に、待合宿は悪所場へ赴き常に賭博の筵に立交つて居るが、如何に詐欺が表家業だと云つて、盆の見えない

み、一攫千金の俄富豪たらん事を希望し、紙幣の這入つた鞆を首に掛けて、投機界へ飛び込んで來る地方の素封家に多いのだ、併し仕掛けた相場が思ふ壺と成功したら、詐欺師の悪策にも罹るまいが、爾うは問